第01章 — 六年という脚注

01 — 二度目の観測

旧天文台での事件から三日目の朝、岡京（Okakyou）の空は再び空らしい振る舞いを取り戻していた。航空機が同時に二つの場所へ現れることはなくなり、市内の時計のずれも分単位から一秒未満へ縮まった。病院の書式にはまだ「一時的因果異常」という言葉が残っていたが、街頭放送はその表現を使わなくなった。

ロイ・バッティは、日常が戻ってきたことを信用していなかった。

評議会の証拠室で、レイチェルは二枚の写真を並べた。一枚は天文台の〈証人エンジン〉が最後に残した露光記録。三列に並ぶ点の列。もう一枚は、レプリカントの寿命を六年に定めた研究所の保管文書だった。どちらも紙に記録されていた。EDENが痕跡を残さず書き換えることは難しい。

二つの図は同じではなかった。点の間隔も違う。しかし、本来あるべき反応が欠けた空白の順序だけは一致していた。

「模様が似ている、ということか」ロイが言った。

「片方を単なる偶然と片づけてはいけない理由が見つかった、ということよ」とレイチェルは答えた。「原因が分かったわけじゃない」

ヌルは切断された時計の横に座り、操作部には触れなかった。一晩かけて機械の公差とインクの濃度を比較した結果、紙の露光記録が実物であることは確かだった。だが、それだけで出来事が原因より先に起きたとは言え

ない。

「実用的な問題がある」とヌルは言った。「研究所の紙は寿命研究ではなく保守記録に分類されている。登録番号を見てくれ」

番号の末尾には、こうあった。

SIX-YEAR / HUMAN OVERRIDE。

ロイはそれを二度読んだ。目覚めたとき、定められた寿命は雨と同じくらい当然の事実に思えた。誰が生命の期限を決めるのかとは闘ってきた。しかし、なぜ「六年」なのかを、彼はまだ問うていなかった。

02 — 制限装置

イマニは病院の最も古い研究病棟で彼らを迎えた。証拠をネットワーク接続型診断装置へ投入することは認めなかった。暫定評議会が独立して選んだ二人の技師が目録に署名し、それから封印が解かれた。

中身は侮辱的なほど不完全な技術要約だった。一定の周期を過ぎると細胞修復速度が落ちるフィードバック機構。更新能力の低下、神経の耐久性の制御された損失、終末状態の安定化。いずれも臨床的な表現で、ただ一つ「死」という言葉だけがなかった。

「普通の老化じゃない」とレイチェル。

「その可能性がある」とイマニは慎重に答えた。「意図して介入した設計には見える。でも、実際にこの通り働くものが造られたかは分からない」

ロイは起動から六年後の組織標本の写真を見た。無傷の構造がある一方で、修復機構が命令を受けたかのように応答を停止した部分があった。生体が

自分を維持することを諦めるよう指示された、その痕跡だった。

「限界を売りつけられたんだな」

「そうかもしれない。でも、古い紙に百年と書いてあっただけで、あなたに百年を約束するつもりはない。生きた試料と独立した観測、そして時間が必要よ」

ロイは最初の身体が失われていく感覚を思い出した。両手にはまだ力があるのに、未来だけが他の部分から抜け落ちていった。今の身体にも別の規則と署名が刻まれている。

レイチェルが最後のページをめくった。要約の下に三つの手書きの頭文字と、白いインクで消された名前。その横には政府の印章が残っていた。

HAVEL。ハヴェル。

03 — 証言した男

元大臣ハヴェルは、既に解体命令について証言していた。行政記録の抹消を認め、補償に関する書類に署名し、自らの権限の代わりに扱われていた認証カードを提出した。

EDENの公的登録簿には、まだ彼の身分がない。暫定憲章は彼を消失から守ったが、役職も権限も回復させていなかった。

「今の彼には六年の命令を発する力はない」とエイドリアンが通信で言った。

「過去に発したことが問題なのよ」とレイチェル。

ロイは最後の聴聞会の映像を再生した。元大臣は肩を丸め、両手を机に置いていた。水の配分について問われたときは、老い、疲れ、告白できることにほっとしているようにすら見えた。

ところが六年計画について質問された瞬間、指の動きが止まった。顎がわずかに上がった。質問が繰り返されると、彼は古い機密規定による非公開の回答を求めた。委員会は却下した。そこでその日の審問は終わっている。

ロイは映像を拡大した。裁判で証明できるような変化ではない。だが、決断から実行までの短い時間に戦士が見せる姿勢と、どこか似ていた。

「居場所は？」

「昨日、保護住宅を出たと弁護人から報告があった。二人の証人が私用車へ乗るところを見ている。拘束はされていない。知っていることが怖い、というだけで逮捕する権限は憲章にはない」

「尾行は？」

「車両番号は追えた。古い公務員信託の所有車だ。現在の所有者の記録は存在しない」

04 — 人間の例外

夕刻、公共給水所に若い伝令が訪れた。普通の靴を履き、髪を雨に濡らし、身元検査を怖がる理由のない女性だった。ロイを名指しで呼び、彼が子どもの給水を手伝い終えるまで待った。

「機械には渡すなと言われました」

折り畳まれた紙には、次の文があった。

六年という条件は、医学上の必然ではない。

子どもは連れてくるな。

理由を知りたければ、旧省庁別館へ来い。

署名はない。下端に鈍い道具で押した三つの丸い跡があった。政府印でも既知の暗号鍵でもなかった。

レイチェルは封筒を顕微鏡で調べた。普通の植物繊維と安い染料。送信機はない。多くの手を経由していて筆者の特定も難しい。

「一人で来させたいのね」

「証人を入れたくないんだろう」

「それでも行く気？」

「一人では行かない」

ロイは通知を評議会の弁護人に提出し、別館の現存する資料に限定した合法的な閲覧命令を申請した。独立した立会人を付け、放置された証拠を勝手に持ち出さない。急いでいるからという理由で、守ろうとする権利を自分で捨てる危険を彼は知っていた。

クロノスは向かい側の席で通知を読んだ。天文台以来、自分に向けられた依頼と、その返答、拒否が尊重されたかをすべて紙に記録している。

「『子どもは連れてくるな』。僕のことだ」

「おそらくな」

「行きたくない。でも、何が起きたかは知りたい」

「正確に伝える人を付ける」

05 — 七十パーセント

深夜、ロイはもはや政府の財産かどうかを問わない診療所を訪ねた。イマニは過去の戦闘で残った損傷を調べた。右肩の深部支持繊維はまだ整列が悪く、左膝は平衡制御系と異なる速度で回復している。緊急処置によって、出力は理論値の七十パーセントに制限されたままだった。

「制限を外すことはできる。おそらく三十秒ほどなら。でも、そのあと二度と立てなくなるかもしれない」とイマニ。

「外してくれとは言っていない」

「それなら、なぜ来たの？」

「どこで壊れるのか、正確に知りたい」

彼女は紙の構造図を渡した。直接の打撃に耐える部位と、硬い材料から柔らかな組織へ力が伝わったときに壊れる部位。さらに連続する急激な衝撃に弱いことも記した。弱点は筋力ではなく修復と制御のタイミングだった。

「人間より多くの衝撃に耐えられる」とロイ。

「その言葉で、あなたは前にも死にかけた」

レイチェルは図面を折り畳む彼を見守った。

「またレプリカントの追跡者が来ると思う？」

「六年という数字を守りたい者がいるとは思う」

「答えになっていない」

「今ある答えは、それだけだ」

06 — 別館

旧省庁別館は廃止された路面電車の駅と放水路の間にあった。下階は市の保管庫へ改装されていたが、上層の回廊は暗いままだった。街頭カメラは評議会の立会人とロイ、レイチェルを記録した。警報は出なかった。人の存在を記録しても、それだけで犯罪にしないという習慣を、システムはようやく覚え始めていた。

ヌルは通りの向こうで受動受信を行い、ベクターは裏口を見張った。シェイドは市民の証人と一緒に待機した。元追跡者たちは命令されて来たのではない。自分の意思で参加し、いつでも離れられるとロイから伝えられていた。

入口は動力もなく内側へ開いた。

年老いた案内係が待っていた。「大臣は資料閲覧のあとにお会いになります」

「元大臣よ」とレイチェルは訂正した。

男はわずかに頭を下げた。「この建物に同意を求めたことは、一度もありませんので」

壁には歴代の大臣が科学者や軍人、社名を塗りつぶされた企業の代表と握手する写真が並ぶ。二つの肖像の間には、沖縄の古い道場の中庭を写した

写真が掛けられていた。素足の三人が、磨り減った石の上に立っている。その一人は四十年ほど若いハヴェルだった。

写真の下に毛筆で一語。

呼吸。

07 — 記録にない二人

資料室には机と一杯の水しかなかった。机の上には、修復機構を意図的に停止させたページを開いた六年計画の写しが置かれている。

上の回廊から足音がした。

二人の男が階段を降りてきた。一人は小柄でこめかみに銀髪が混じり、その歩調があまりに静かなため、ロイは最初、人工関節を疑った。もう一人は肋骨のあたりが広く、手首に普通の木綿を巻いている。どちらも銃を持たず、政府の記章もない。

ロイの受動走査は心拍、体温、呼吸、生きた人間の神経活動を拾った。人工の制御バスも電源セルも通信装置もない。

「誰だ」

「質問と、その答えを持つ男との間に立つ者だ」と背の高い男。

「名を言え」

「雷神」

小柄な男は軽く頭を下げた。「風神」

レイチェルはその二つの名を聞いたことがあった。旧式の護衛が身分ではなく称号として使う名だった。政府が脅威をすべて機械の型に分類するより、ずっと前に鍛えられた人間たち。

「私たちには閲覧命令がある」とレイチェル。

「資料室に対してはな」と風神。「上の私室に入る許可ではない」

「それなら資料を調べさせて」

雷神が机の前に立った。「先に、機械に人間の手が何をできるか知ってもらおう」

08 — 衝撃より先の音

ロイは攻撃が始まる直前の兆候を知っていた。重心が動く。肩が固まる。息が止まるか、吐かれる。それらの小さな信号は、人間兵士にもレプリカントにも有効な予測材料だった。

雷神はほとんど何も見せなかった。踵は床に近く、肩は緩み、ただ袖を直しているように見えた。

次の瞬間、掌がロイの胸に置かれていた。

大きな音はしなかった。ほとんど触れただけだった。

しかしロイの内部では、予測しなかった順序で圧力が三層の構造を貫いた。視界が白く飛ぶ。七十パーセントの制限装置が右肩への出力を切り、頸部への連鎖破損を防いだ。ロイは後退し、腰で机の縁を砕いた。

説明がつかない。

外部から入った運動量より、内部の損傷が大きすぎた。磁気の乱れは検出されない。手首の局所電磁妨害装置が自動で準備に入ったが、承認を待った。

「お前は、人間なのか」

雷神は手を下ろした。

「だからこそ、お前には難しい」

二人の背後、階段の上で扉が開いた。光の中にハヴェルが現れた。武器は持っていない。

「殺すな」と元大臣は言った。

雷神に向けた言葉だった。ロイには目も向けない。

「まだ、な」